

懐かしいキューバが変わっていく！？

“カリブの赤い星” キューバと米国の上に劇的な変化が起ころうとしています。1959年の革命の直後から外交関係が断絶されていた両国が、国交正常化のための準備を始めたのです。イスラム国などという異常な集団が武力侵略を続けている中東を初め、ウクライナ問題など不安定な政情が続いている地球上の一隅で、なにか平和への期待が膨らんでいくような気もしてきます。つい1カ月前にはキューバの国家評議会副議長が来日し、安倍首相をはじめ日本政府の関係者とも接触を持っていました。

両国の関係について私の関心が高いのは、かつて聖教新聞の特派員として何回かキューバを訪れた感慨からくるものかもしれません。キューバに対して厳しい目を向けている政治家や知識人も少なくないことは承知しています。でも、入国すること自体が難しかった時代に、現場に足を踏み入れ、市民とじかに接した体験は、それなりに説得力があると思っています。

話はもう20年から30年前のことですが、すべてが「アスタ・マニャーナ」（日本語で「あしたまた」との意味です）で進むラテン・アメリカでは分・秒を大事にする効率第一の日本と比べ時の進行が遅いのです。話はほぼ現在にも通じているととらえていただいても大丈夫でしょう。以下は当時のレポートを思い出しながらのエッセイです。

現代史の変化の激しい流れの中で、キューバは今なおカストロ政権が続いています。かつてのアメリカ政府に支援されていたバチスタ政権からチェ・ゲバラと一緒に社会主義革命を成し遂げたフィデル・カストロは、その後ずっと国をリードしてきていましたが、2008年、弟のラウル・カストロに国家評議会議長を移譲しました。一人の政治家がこれほど長期にわたって一国を引っ張ってきたケースは極めて珍しいでしょう。

それを「独裁政権」という人もいます。でも北朝鮮の“将軍様”と違って、私の見知った限りでは、フィデル（カストロが姓、フィデルが名前を親しみを込めた呼び方になります）は今なお国民に人気があります。政治の処方の問題はあるとしても、少なくとも“民衆のため”という革命時の理想は今なお消えてはいない。そして社会体制も一部に資本主義経済の要素を取り入れることはあっても、根本的な転換はまだずっと先のことでしょう。

32年前、私が初めてキューバを訪れたときは、入国ビザを取得するのに大変複雑な手続きが必要でした。国の経済も貧しかった。でも治安は中南米でも最もよかった。夜中でも街中を平気で歩くことができた。他の国では考えられないことだったからです。それは貧しいけれどもなんとか食べていけること。国は教育や医療に重点をおき、15歳以上の国民の識字率は99%で中南米では最高水準、医師は人口1万人に670人と世界で最も多い国に属しているという状況が犯罪を少なくしていたのかもしれない。

社会主義国とはいえ、キューバはもともとカトリックの国です。一体、人々は社会主義と宗教と生活をどう捉えているのだろうか。そして国際政治との関係は？こんな湧き上がる疑問にひかれて、私はメキシコ訪問の機会を利用して、思い切ってキューバまで足を伸ばしたのでした。

空港は、カリブ海の“大国”に反して予想外に小さいものでした。成田など大きな国際空港にある飛行機が横付けになるゲートはなく、ゆったりとタラップを降りる。からっとした高原都市メキ

シコに比べ、湿気を含んだ生温かなカリブ海の風が体を吹き抜けていきます。バスに乗って入国審査口へ。第1の関門です。

「コンパニエロ(同志よ)、泊まるホテルはどこ？」

係官との応答や調べもの、それに税関通過を含めて空港を出るまでに小1時間。ところが——問題はまだその先からでした。タクシーをつかまえるのに、これまた“大奮闘”をしなければならなかったからです。

着いた先にいつもピカピカの車や出迎えがきている大使館の関係者や、訪問先に支店、営業所を持つ商社員と違って、こちらはいつも入国手続きからタクシー探しまでの一切を一人でやらねばなりません。しかも国によっては、どさくさにまぎれて起こる荷物の紛失・盗難に気を使わなければならないこともあります。

タクシー乗り場には10人ほどのキューバ人が列を作っていました。それがほぼ5分毎に1台来るタクシーを待っていて、結局、私の番が回ってきたのは30分後でした。

乗り込んだ車は1957年型のアメリカ製ダッジ。街を走っている車には古い型のものがかなり目に付く。旧型のアメリカ製大型車。比較的新しい型では、ソ連製、ドイツ製、アルゼンチン製等々。ラテン・アメリカを席卷した感の日本車は、ここではまったくといってよいほど目に付きませんでした。この車の旧さといえば、翌日拾ったタクシーの一つは、実に1952年型のシボレーでした。運転手いわく。「もう30年にもなるけど、この車よく走るよ。ダンナ、そんな旧いのに興味があるのなら1948年型だって走ってますぜ！」

1940,50年代の型といえば、すべてキューバ革命前のものです。とんだところでアメリカ製車の頑丈さを証明しているのは、当時の反米感情と引き合わせてなんとも皮肉でした。

タクシーに関してもう一つの新鮮な驚きは、そうした旧型車にもかかわらず、料金メーターがついていたことです。我々日本人にとって、タクシーにメーターがあり、更に自動開閉のドアもついているのが当然のようになっていますが、中南米ではごく限られた国のみです。

それまでの中南米の旅のなかで、メーターのついたタクシーとの遭遇は珍しく、私にとってはちょっとした感激でさえあったのです。なぜなら、いつもタクシー乗車に際しては、まず目的地までの値段交渉から始めなければならなかったからです。それが、メーターに出た料金をそのまま払えばよいという単純さに、少々あっけないような感さえもしたものでした。

夜、すべての取材が終わった11時過ぎ、国営キャバレー「トロピカーナ」へ足を運びました。在住の日系人からも「キューバの一面を知るためにもぜひ見ておくべきですよ」と勧められていたからです。

なるほど、世界でも有数という星空下の野外ショーは、社会主義国キューバというよりラテン・アメリカ人の民族感情、文化的伝統に触れるのに恰好の催しでした。

森の中のような自然をそのまま生かし、それに大掛かりな舞台をかみ合わせた自然と造形の巧みな融合。やしの木から覗いて見る夜空には、星が降るように輝いてたぐいまれな演出です。乾季には雨の心配もありません。

舞台の周りは野外レストラン風になっており千人を収容できるという。それぞれ、テーブルを囲んで夕食をとり、ビールやウイスキーを飲みながらショーを楽しむ。舞台では、超ビキニに、原色の派手なカリブ風衣装をつけた、はちきれんばかりの豊かな胸の女性がネオンの輝くもとで乱舞していました。ときどき観客席まで降りてくると、こちらがそのボリュームに圧倒されてし

まいそう。

ラテンの激しいリズム。ブラジルのサンバ。アメリカのディスコ調音楽とアフロ・キューバン・リズム——。この中にいると、つい“これが社会主義の国だったかな？”と疑ってしまう。キューバの社会主義は市民の楽しみを奪ってはならない、という。共産圏からの政府のお堅い招待客も、これにはきっと戸惑うに違いありません。観光客向けだとはいえ、やはりここには、もともとマンボ、チャチャチャなどで、世界を風靡したアフロ・キューバン・リズムを愛好する民族の血が、政治体制とは関係なく反映しているのでしょう。

ところで、この間のうれしい変化の一つは、その社会主義の国に仏教徒が誕生し社会貢献の活動をしていることです。その一粒種とも言えるメンバーを首都ハバナに訪ね懇談しました。キューバの一市民であるCさんは、国外に住む友人のキューバ人から仏法について話を聞いた。その後、手紙によるやりとり、また友人Nさんのキューバ訪問等により次第に関心を深め、唱題を始め御本尊を受持することができた、というものでした。

仏教徒として信心を始めたCさんが、病気の克服、家庭不和の解決と、社会体制の異なる土壌にもかかわらず功德に浴している姿は、何ものにもかえがたく嬉しいものでした。

仮に政治で“物の平等”は実現できても、人間一人一人が持つ宿命は解決できない。ここに唯物主義と唯心主義を止揚し、人間の生命次元の平等を実現する仏法が必要になってくる。“カリブの赤い星”の国で同志の誕生に、なんともいえぬ感動が胸奥より込み上げてきたものです。

そして、1996年には池田SGI会長が同国を訪問しカストロ議長とも懇談しました。懇談の内容の奥は知る由もありませんが、大きな注目と話題になったことは、いつも軍服の議長が背広とネクタイ姿だったことです。「平和の指導者をお迎えするのですから・・・」と。革命以来、公式な場では初めてとのことでした。

あれからまもなく20年。現在、社会主義国キューバでも創価学会が正式に宗教法人として登録され、仏教徒メンバーが自身の人間革命と社会貢献の活動に励んでいます。アメリカとの国交正常化はまた一つ、キューバの国の発展と市民の生活向上につながっていくのではないかとそんな希望と期待をもたらしてくれるニュースへの私の感慨です。